第三篇　大聖、晩年の光輪　その一
十九、経　　力
十九日　西山殿後家尼御前御返事（定遺　１９０２）

あまざけ一をけ、やまのいも、ところ（野老）せうせう給了。梵網経と申す経には一紙一草と申して、かみ一枚、くさひとつ。大論と申すろん（論）にはつちのもちゐ（土餅）を仏にくやうせるもの、閻浮提の王となるよしをとかれて候。これはそれにはにるべくもなし。そのうへをとこ（夫）にもすぎわかれ、たのむかたもなきあま（尼）の、するが（駿河）の国西山と申すところより、甲斐国はきゐ（波木井）の山の中にをくられたり。人にすてられたるひじり（聖）の寒にせめられて、いかに心ぐるしかるらんと、をもひやらせ給ひてをくられたる歟。父母にをくれしよりこのかた、かかるねんごろの事にあひて候事こそ候はね。せめての御心ざしに給候かとおぼえてなみだもかきあへ候はぬぞ。日蓮はわるき者にて候へども、法華経はいかでかおろかにおはすべき。ふくろはくさけれどもつつめる金はきよし。池はきたなけれどもはちすはしやうじやう（清浄）也。日蓮は日本第一のえせ（僻）もの也。法華経は一切経にすぐれ給へる経也。

（弘安四年）